

シャルル・ドゴールの 体現するもの

廣瀬 誠 陸自73

防衛3文書の改訂が行われた。わが国の防衛政策を体系的に整理し、反撃能力にもふれる等、画期的な内容となっており、それと並行して防衛費の大幅増額に伴う増税が議論となつてゐる。ウクライナ紛争の実態が知られるにつれ、また台湾危機が叫ばれ、北朝鮮のミサイルが再三に亘つて飛んでくる事態に、防衛に関する国民の関心も漸く高まりつつあると言えよう。

それでも、憲法改正の議論は遅々として進まない。憲法前文に象徴されるように、国民と国家の關係はわが国では中々真つ直ぐにつながらないようである。そこでは、国家と国民は対立するものとして捉えられているように見える。

その国家について考える上で、シャルル・ドゴールの生き方とその時代のフランスの運命は興味深いものがある。

第2次世界大戦において、緒戦におけるフランス軍の惨敗は英国にとつても驚きであつたらう。マジノ線への過信、ドイツの主攻撃をベルギー正面とした思い込み、第1次大戦の記憶、防勢的なドクトリン等、多くの要因があつたといわれる。

ドイツの攻撃に瞬く間にパリを陥れられたフランスはドイツと和平を結ぶにしても、英仏間の協定により単独講和はできないこととなつてゐた。フランス政府内でも講和か、徹底抗戦かで紛糾する。ドゴールは、アルジェリア等植民地で抗戦すべきだと主張する。チャーチルは、フランスの戦争継続を強く求める。英国側では英仏合併まで議論に上がる。



シャルル・ドゴール
(1890 - 1970)

出典：ウィキペディア

しかし、レイノー首相は退陣しフランスは降伏してその半ば以上を占領され、ドイツに協力的なヴィシー政権が発足する。第1次大戦の英雄であつたペタンがこれを率いること

になる。ドゴールは、陸軍次官かつ臨時少将にすぎない身でありながらあくまで敗北を受け入れず、ロンドンに亡命し「自由フランス」(後に「戦うフランス」と改称するが本稿ではこの名称を用いる)を立ち上げる。フランス本国では、軍法会議が開かれ、ドゴールに死刑判決が下される。

ドゴールには、このまま「威信」を失ったままのフランスでは、もはやフランスとはいえないとの強い思いがある。チャーチルの同意を得て、本国に向かつてラジオ演説を行う。しかし、当時ほぼ無名のドゴールの呼びかけは、当初それほど大きな効果はなかつたようだ。

ほとんど鎧袖一触で破れたフランスであった。ドゴールも、フランスを破つたドイツの電撃戦のドクトリンと同様の考えを戦前に提言していたが、フランス軍の採用するところとはならなかつた。実際、当時の独自の戦車の総数は拮抗していたといわれる。しかし、マジノ線への過信もあるが、戦車は歩兵に随伴する考え方のフランスは、そのスピードを生かせず、なすところなく敗戦した。運用思想の重要性を示すエピソードだ。

ヒトラーの逡巡にも助けられて、英軍はこの混乱の中ダンケルクから間一髪で漸く脱出したのだつた。この脱出劇により生還した部隊は、その後英国の反攻の基礎をなすことになる。しかし、英国を守るものは今やその海軍だけとなつたが、七つの海を制覇したその威信は衰えず、英海軍が健在のうちにはさすがのヒトラーにも対英上陸作戦は難しかつた。そして、英国の運命を分けるバトル・オブ・ブリテンが始まる。この時点でアメリカは参戦し得ず、英国は欧州でひとり孤軍を守る形となつた。フランス回復の命運も英米が握っている。

ドゴールに対して、徒手空拳で何ができるか、誰もがそう思ったであろうが、彼はたった一人で不屈の戦いを始める。はじめはチャーチルも半信半疑で値踏みしつつ見ていたようだが、ドゴールの固い意志の力を見て、徐々に力を貸すようになる。ドゴールは、ルーズヴェルトとはそりが合わないようであつたが、チャーチルは、その頑固ぶりに閉口しつつもよくドゴールを助けている。「自由フランス」に、徐々にでは

あるが亡命中のフランス人や本国から人材が集まり始める。イギリス国王の閲兵式にも、形だけとはいいなから自由フランス軍は参加する。アフリカのダカールに対する作戦への参加は失敗に終わるが、アルジェリアの親フランス勢力と連携し、フランス本土の抵抗勢力とも連絡をとつて祖国フランスを取り戻す準備を着々と進める。

ドゴールの自由フランスは、英国とともに戦うに際して、英国による自国の国益第一とする判断により、苦汁を飲まされたことも一再ならずあつたが、それでも最後まで、共にドイツと戦うことになる。

待たれた連合軍のオーバーロード作戦(ノルマンディー上陸作戦)は1944年までずれ込み、その作戦がドゴールに知らされたのは、正にその直前であつた。しかし、ドゴールは、オーバーロード作戦に自由フランスが参加できなければフランスにおけるレジスタンスの協力を拒む姿勢を見せる等、フランスの解放にフランスを代表する組織が携わる姿勢を強く主張した。オーバーロード作戦には後続部隊として自由フランスの部隊が参加する。フランス国内

の抵抗勢力が行動を開始する。パリの解放には、アイゼンハワー隷下にあつたルクレール第2機甲師団が一番乗りを果たす。これもドゴールによるアイゼンハワーとの会談がもたらしたものだ。ドゴールに対するフランス国民の支持と歓迎ぶりは熱狂的であつた。

しかし、共産党の組織がレジスタンスにおいて活発に活動して解放に貢献した結果、解放直後の国内の主導権争いも熾烈であつた。ドゴールは速やかにそれまでのレジスタンスの軍事組織を正規軍に組み入れている。国家として、実力組織を統一するためである。この辺りの見通しも優れている。

ドゴールは、フランスの回復で満足せず、連合軍としてドイツ侵攻作戦に引き続き参加することで、結局フランスは戦後のドイツ占領の一翼を担うこととなる。

ドゴールは、文字通り、政治外交的な資産を持たない状態から、その愛国心ととても強い意志力で、一敗地にまみれたフランスを第2次世界大戦の勝者、そして国連安全保障理事会常任理事国の一国にまで押し上げた。開戦当初から、祖国を下

イツに占領され力の裏付けのないドゴールは英米のリーダーにまともにも相手にされない苦汁を幾度となく飲まされてきたことは上述したが、初めはヴィシー政権を承認し自由フランスには目もくれなかつた米国も、今やドゴールを無視して対欧州政策は進められないこととなった。

第2次世界大戦は、実質英米2カ国の主導で勝利したといつてよいであらう。その中で、緒戦で一敗地にまみれたフランスをここまで押し上げたドゴールの業績は信じがたい壮挙であり、文字通りフランスの誇りであらう。それは、ドゴールの愛国心、フランスの偉大さに対する強い信念、そしてそのカリスマ性による。その分、強い信頼を寄せる味方も多いが、その一方で時に傲岸不遜とも映る孤高の性格から敵が多かつたことも事実であらう。

第2次世界大戦が終結するとドゴールは国民に第3共和政の体制を続けるか、あるいは新たな体制を望むかを問い、後者を望む国民投票の結果を踏まえて、憲法制定会議を立ち上げ新しい憲法に基づく新たな共和制の立ち上げを図る。大戦における緒戦の敗退を招いた旧体制をその

ままで、戦後のフランスを再建することは望まなかつたのであらう。しかし、総選挙の結果、新しい議会における共産党等左派の力は、戦中のレジスタンスにおけるその実績を反映して強く、議会運営に失望して引退する。

しかし、1958年、フランス大統領として復活したあとも、フランスの主権を守るということに全くブレはなかつた。それは、MLF(多角的核戦力)構想への反対や、独自核戦力の保持、NATO統合軍からの離脱、NATOを含む在外外国軍の撤退の実現などに現れており、米国は勿論、欧州諸国も多くが反対したが、結局実現させている。

彼の進めた核戦略は、所謂ミニマム・デタランスという考え方であるが、米国との軋轢があつたにも拘わらず、英国の核とともに定着している。彼は、国家の主権というものを常に見ていたと思う。現在でもフランスの国家の威信はその大きな部分をドゴールに負っていると感ずる。ドゴールの歩んだ道は国家とは何かということ、改めて考えさせて

くれる。自由フランスの軍隊がパリを解放したことに象徴されるように、連合軍の一角としてフランスが勝者側に加わつたことは、フランスの国家としての威信をいかに高めたか。おそらく、フランスがただ連合軍による解放を待つだけで終わつていたら、現在のフランスの威信は、間違

いなくなかつたといつてよいであらう。孤立無援の逆境の中でも、断乎として祖国の回復を目指して妥協なく進んだドゴールの存在は、とかく現状に流されがちな戦後の私たちにとつて、瞠目すべき人物に映る。強引とも思えるリーダーシップの背景には、強いリーダーを望み、また許容する西欧の民主主義の伝統があるのであらう。

この種の英雄をわが国の歴史上に見出すことも、むずかしいことではない。しかし、時代も場所も違う現代の日本に、ドゴールのような自立自尊の強烈な個性と実行力を持ったカリスマを望むことが可能だろうか。現代は、英雄を必要としない時代だといわれる。歴史教科書を散見しても、人物史としての記述は控えめで社会史に重点が置かれているように見える。歴史の中に人物の躍動を見

るといふような歴史教育を、少なくとも私の経験からは、受けた記憶は殆どないように思う。民主主義には強いリーダーが不可欠なのであらうが、わが国では、明らかに強いリーダーは望まれていないように見える。安倍元総理の国葬で、献花台に

延々と並ぶ長蛇の列は、日本国民の深い哀悼の姿を表すとともに、安倍氏を失つて、将来の危機に対しわが国のために決然として処する人物をこれからも私たちは生み育てることができるとかとの漠然とした国民の感覚を見たようにも感じられた。ドゴールの存在は、私たち戦後の日本人に決定的に欠けている何かを鮮やかに提示しているように思える。

【参考文献】

- ・ミシェル・ウイノック『シャルル・ドゴール 歴史を見つめた反逆者』作品社
- ・佐藤賢一『シャルル・ドゥ・ゴール 自覚ある独裁』角川ソフィア文庫
- ・山本健太郎『ドゴールの核政策と同盟戦略』関西学院大学出版部
- ・シャルル・ドゴール(小野繁訳)『剣の刃』文春学芸ライブラリ
- ・Jonathan Fenby "The General Charles De Gaulle and The France he Saved" Simon & Schuster